「若手教師が育つ学校」に関する実践的研究

—教師の発達プロセスに着目して—

令和3年度入学

熊本大学大学院 教育学研究科

教職実践開発専攻 学校教育実践高度化コース

山田 真一郎

実践報告書要旨

2021年（令和3年）4月～12月の大津町立大津中学校の実習では、理科講師の授業補助、教務部や研究部の支援などに携わった。前年度の定期異動で多くの職員が入れ替わっていたことや、研究発表会に向けての準備に追われる状況もあり、校務分掌の協働体制や若手教師のフォローアップ体制に綻びが出てきているように感じた。

そこで2022年（令和4年）1月～3月にかけての実習では、全職員に対して今の学校の課題や次年度に向けてどのようなことに取り組んでいきたいかを尋ねるインタビューを行った。若手教師からは、主に授業や校務分掌についての悩みが多く聞かれた。校務分掌については、生徒会担当の若手教師から「経験の浅い職員同士で組んでいるので、誰に聞いていいのかわからない」という、すぐには解決が難しい課題もあることが明らかになった。中央教育審議会答申(H27.12.21)には、「近年の教員の大量退職、大量採用の影響等により、教員の経験年数の均衡が顕著に崩れ始め、かつてのように先輩教員から若手教員への知識・技能の伝承をうまく図ることのできない状況があり、継続的な研修を充実させていくための環境整備を図るなど、早急な対策が必要である」と示されており、若手教師の育成は喫緊の課題とも言える。

本研究の目的は、若手教師が育つ学校では、どのような指導や助言、支援が行われているのか、その取組が若手教師の成長（発達）にどのような効果を及ぼしているのか、共通する考え方はあるのか等を調査することで、効果的な若手教師育成の在り方を明らかにすることである。

本研究では、菊池教育事務所管内の小学校4校、中学校4校の計8校の調査を行った。調査校は、各地区の教育委員会から若手教師が育つ学校として推薦してもらった学校である。令和4年6月上旬から10月下旬にかけて、若手教師や管理職へのインタビュー調査や参与観察を行った。

研究で明らかになったのは、若手教師の育つ学校では、1)校務分掌、2)授業力向上、3)管理職のつながり、4)学年部の工夫を通して育成支援が行われているということだ。1)校務分掌では、若手教師に校務分掌の主任を任せる学校や強みを生かした校務分掌を任せる学校、2)授業力向上では、インフォーマルな学びの会で若手教師を育てる学校や教科担任制の工夫で若手教師を育てる学校、3)管理職とのつながりでは、日々の小さな声掛けの積み重ねで若手教師を育てる学校、4)学年部の工夫では、職員室の座席配置・教室配置の工夫や学年部の職員の支えを通して若手教師を育てる学校がみられた。若手教師の育つ学校では、各学校のリソースに応じて、若手教師が日々の実践から学ぶことができる育成方法を工夫し、周りの職員が若手教師の悩みや不安に寄り添い、時に支え、励まししながら力量形成につなげていた。一方、学校現場は多忙を極めており、学校内だけの育成支援体制で若手教師を育てていくことが難しくなっていることも事実である。育成支援加配や、育成支援アドバイザー、市町の育成支援等を拡充していくことで、より効果的に若手教師育成を進められると考えられる。